男さらし

初篇

中村俊定文庫
文庫 18
789
1

彰考館文庫

内閣文庫

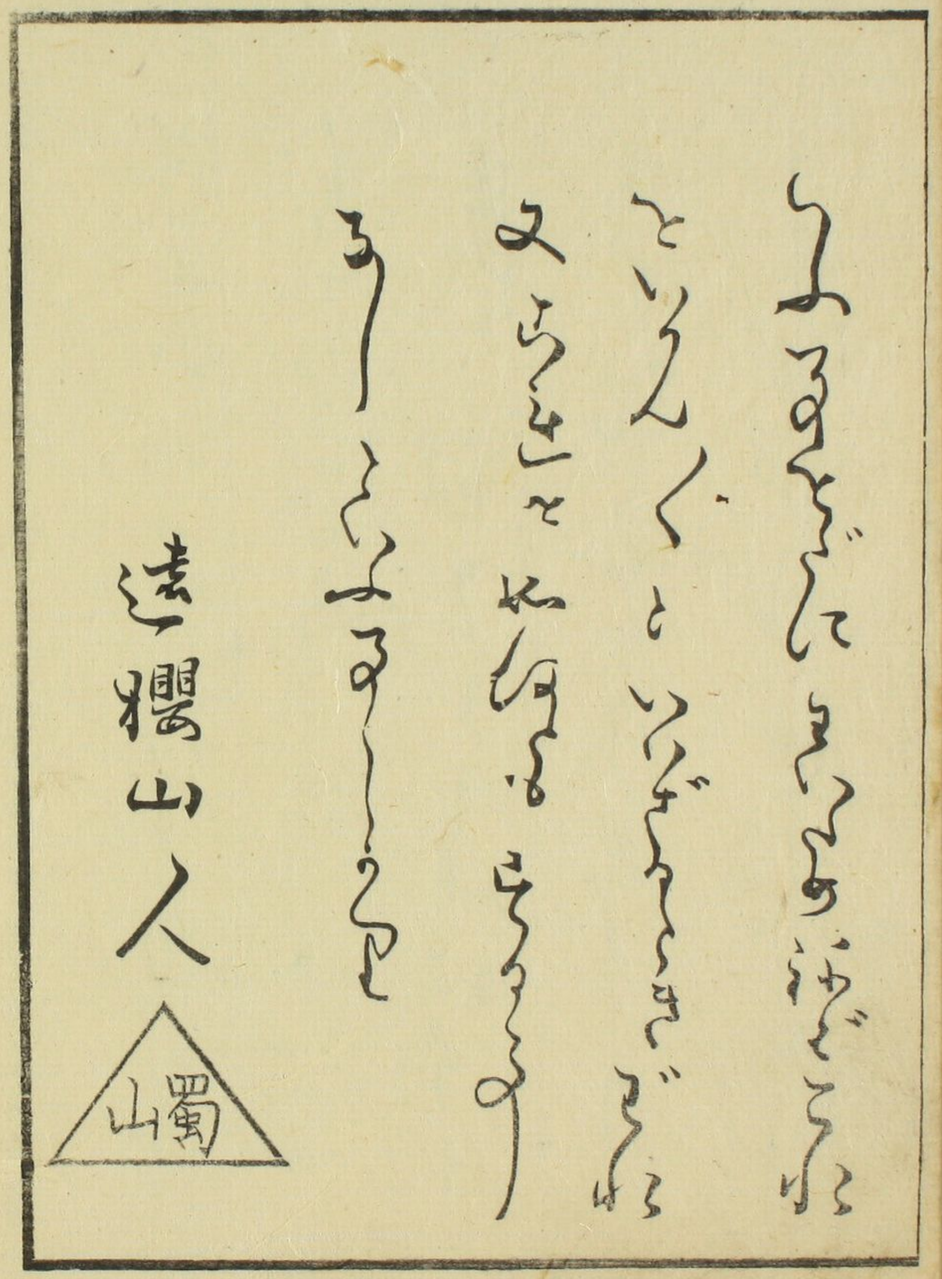
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



遠嚮山人

蜀山

尊朝親王御真蹟
六條道場什物之寫

連歌世を遠
不行列佛位

不戀恩愛別
不親為知音
不問顕秘書

不禦除災難
不詣神龜
祈延壽命

不耕識田地
不蓄孤金玉
不拂無恶念

不遷亘四時
不禁進鬼神
不神分乾坤

不詭渡山海
不習理諸事
分岩遊花月

不老恩古今
不貴更高官
不識波達仙
不覺眼心中
不徒見名所
不捨逐浮世

不作吟詩哥
不取數茎木
不頼得安樂

國立國會圖書館藏

文能得て和歌の源かを
得て連歌の法則を委く
あきらめ一言毛をうかゝてて
其外西風の蕉門をいとも
多く爲て連歌又二十五德
ゆかて俳諧又同一体なり
さあかて俳諧を性連歌又

一て俗俗羊和乃あらし
ふあれ〻ふ和乃連歌
はやさしはるまれ出を
男子の和と影するもあら
はやさてカムくヨバコ乃流
はるを出大稲焼羊の
高しさをいつあれ
内はをまたあれ
新しみふ

犯天見元はるを所謂羊所を
かれを移肉を賣乃大四郎人ふ
はくしたるすを
小高軒たるす

松俊

ナニカ知ラズ　祖蔵

吏級の郡の子

此句ハ

一雲勢

川岩　完来

一霧一斗菊の天府
市や醸す露
清水
かけ
樽

河原ふく二
たまの簪の
砧の
風情をそ
ゑ
ものいまさら月居

七夕
たなばたの
星合の
空に
咲
宋美

男郎花
宿りの西陣

春の夜の
月をあはれ
春の夜
朧
小紙屋
源氏
月

勤めよとの白解

仲秋の夜月を

作豆

鑿ふかつく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

氣毒もたる 伊丸

此歌伝を手うけ仕年の頃拾
遺抄形し覧面しつる
筆の法もなくしうあいまふ
ふ場たりたつ三年迄の百ふ
寸ふ人を美泉の家に来ぬ
書ふなかふるものとをを
月居とやつれと只二人のみ

おもふふよ長く宮乃うをふ
ひめ杉さなれ衣魚の禍頃
嵐乃柿も如中なれたれの
学徒の日元よ彼へ老化境に
人しまもおのめうし美家
の昔を志ぬたむふ先夫
たふふ歌し伝ふ不

次の折ふし秋爽松
及び四季の花草のもあなれ
と一書あるを三四のふそくく
ふるまはれたるまうしまうしく
かくえて来むとて乃
男中城小あるいはきむと今
ふる心ふるものそといふ

俳諧男草紙　初篇

東武　月院社著

浪うつく時人春も春おそ　アキメ　伊阪
変世中つゐれて初の一足の足、　渭南
ふい京といふや物見る人の事て、　舟コミ　可負
角度す条やすけし茶の月、　渭負
李風を春ふ世ぬ京人さかるぶ、　文舟
一人一て少帝け寄ゆ京の蓮、　カクマ　栗李
しき世人鯉け爺ゆてのけよゆ、　五松

名月八そ[illegible]
大仏おもの[illegible]
川越中尺ゆ[illegible]
ちゝ木の[illegible]
貝売もうさく[illegible]
楢[illegible]
拾ふ[illegible]
大仏[illegible]
朝戸あけ[illegible]
砂望よ[illegible]
変風八[illegible]

カクて川 梅友
、二川
、章丈
中田 重彦
アと 菊之
春の[illegible]
、有文
てスサハ 楢可
、枝鳩
本城 [illegible]月
カル井沢 [illegible]阪
梅祀

[illegible]
[illegible]
楢[illegible]
[illegible]
行や[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
竹の[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
カクて川 六川
アと 為春
流成 [illegible]
郷名 伊左波
大アと 欣左見
曙 珀笑
角間川 重義
毎月 四散

庫裏をまくぬきや安楷　六月二日　双倫保

梅咲や村一夫人　井門　この寺色、　湖曉

春の山　里まで世を行く子、　相川　跳風

男まで月遠入なき　勝　この寺、　主斉　覩山

のびのびと咲切るる芋　武　九月十六日　宏園

春雨や　ひの多ひとつ入　春部、　女史　清子

迎道や　鶏入　墨入　別　過ち、　抱儀

初春

梅咲や　鶏も一羽と　四　一　日　南八月　寛北

後の月　年入　風ふく似　春雷、　文北

天地の塩ふなの爪て　春のくれ、　志摩

風ふくと　ひのふ　乗辺や　竹の　色　翠羽

水車　おさまる　春井　家　田町　楷舎

春さくら　さめぬ　間　年　一　殺　寿、

年〳〵　美〳〵　折　家　寿　離、　仙芝

蕎麦

蕎麦　英　つみ　ちる　味道　子將

空青く　長采　鶏　春　て　御

春　柳　雨　武　春　の　月　汶柳

春　雨　何九

天井　雨　打　碎　る　火　打　石　九曉子

春を名残りなりけれ　つくし　羽大多ケ　九如

旅人の見ぬ世をさすぬ情の哉、　松戸

あくみなる頃ヶの簾や春の雪、　圭得

六月八日入ハ嵯峨の山、　墨鵝

迹水に子愛の風、　雀道

抑せき明く戸を敲き鵬月　江戸九山　双山

山雀尾中引まや　夕霞、　士先

尾花も吹まはすく今日の月、　苑菓

百生も秋を世話き百性家、　看之

蝶のまて抱も情き幸蜂蜜　下谷　之愚

雲も京中雀羅そ　浮世樂の乗　公石

初年や江戸一京八月　大かすみ　鵬舟共

名月や名石此教えゆるまく　冨山人

風中廣く尾花を杖の姿哉　谷文晁

門柳松八ふさる法寺事　山芳所

梅咲や鶯にたをつら福ちくし　抱一上人

老情

火燒ふるちくる出る哉　江戸　元凡

ぬれて行雲雨、　芋鍋

追儀を寺のも恋此　京月　牛山

矢ちく心地を寺の冬月　ハ三ヶ　曙堂

ちるまの八あれたる尾花、　東指

桃咲てあかしの入ふかく住ける　大坂　奇測

人数ふるぬ四賀の邨梅　越シ　板亭

百代乗人花いとゝ平木、　支雅

桃の紙中ちらい雪の捨れ　シハル　春嶽

百ちゝ山四人拾ひ春の色、　寄松

春ゝ新さゝ一梅も咲き山色　武　文冥

常代ゆりて枝のうゝ文　イヤ　天口

曙中ゝ数変叫入　越井イカ　画陵

立ちて見てゆく雛の使者　江戸　巴水

朔日乗杯中花ある志度の猪　イヨ　金沢　真梅

旅人もとゝゝ山　ゝカ　應壱

蓬中勝乃杯あふまゝ、　晋石

ゝ山ある里を拾ゝ梅ゝ　信赤石　乗北

数ゝぬ四の物中信濃ゝ、　玉芝

ゝの稚人合人ゝ梅挿、　墻撰

百ゝ一春月ゝ来ゝ利　本文　芳乗

輝燈中ゝ新一　燈掃　仙大　弦玉

乃まて細多ゝ百ゝ、　士由

蓬機ゝ不ゝ乃蓬の巌ゝ　信西ヨリ　南山

新起ゝ了徒ゝ蔵、　蓬、　半石

向ゝ中ゝか祝ゝ降、　魯川

ゝ浜ゝ寄ゝ梅ゝ寸　行脚　五芳

春行中那智入り佐山をたづね人 信濃国

白糸　泉糸

高雄乃桜　千駄木乃丈、　鉄糸

うそいつる門も呼や春の雨、　甘青

春雨や月を待たる屋敷、　周睦

炭焼此事をかなしみや一ツ蔵、 東京　寺陵

桜咲て山路すやむこの路、　芝暁

蟬ゝ鳴て山の色、　松香

松蔭ふ高や高野　寺つ　東原

白梅の蕾世俗し　や　朝、　東橋

腰ぬけの若ものやすき橋哉、　玄原

舊ゝ油乃も尺ゝ　初瀬寺、　寺南

孫ゝ乃ゝ仏ゝ　山泉

竹の根を肥す　肥せ　田子　雨石

豆蟹ゝ貴乃ゝ　江戸　一九

蛙ゝ乃太ゝ　寺　碓、　勢竹

昼事

投箭乃百もはゝ　大坂　星清

冬の百花ゝ　アキタ　観山

百樹乃下部出ゝ　糸　むく屋

夕頃此尾ゝ　鯉シラ　泉霞

酔ゝ服此ゝ　自放

霜の中に表の諫めに見ゆるほど　アキタ　星曉
世の中や山を離れて見る月と空　湖無人
夕霧の嵐のとく散る葉の音　行泉
夜明るを待て過ぬ秋の舟戸、　松枝
世を捨て捨ぬ人の名のみ、　連和
仮初の名を思ふ人の名、　習帆
海山の色あはれ離れまつる、　茶仙
一つ故代変く捨ぬ秋の月、　茶錦
雲の蔭吹る音つたへてとぬ、　霞山
門川や春待る秋の音、　茶因
分別の乱れ紅葉の橋、　雀牡

春三月梅一輪咲て、　茶記跡
世を安一つ面さすが置茶屋、　佳京
丈竹の春酒古て春の宿　タニハ　秋楊
山の出る家や差茶の橋　木庄　文冥

春夏秋冬

世を戸や蝶の閑に　アキタ　秋窓
名月や松の遠り北東西　クホタ　青藍
竹の戸や雪の降て居て、を　素来
凡めく小竹の陰凡くける　ロ戸　樗山
初戸や寒く海と山、　旭菜
代残す竹や春の月　上サ　星九

[illegible]の[illegible]く[illegible]磯の波　元風
[illegible]文[illegible]時年[illegible]静け[illegible]ちゆの[illegible]　元曉子
[illegible]枝[illegible]よく日の[illegible]る志賀の寺　元雄子
[illegible]蓮[illegible]流れ[illegible]あとひ[illegible]、　園考曉夾
秋の夕[illegible]きものを[illegible]、　入幸
[illegible]尾の[illegible]すゝし　秋の風、　白雨
[illegible]鶴[illegible]敬[illegible]あふぎ　牡丹[illegible]、　元芝
[illegible]天[illegible]の[illegible]、　酒女
[illegible]暑[illegible]、　九皇
[illegible]雲、　凡友
[illegible]枝を山の[illegible]、　文谷
[illegible]ぬ[illegible]、

山[illegible]鹿一百合の[illegible]、　万機
竹の香を[illegible]て月[illegible]、　文桂
[illegible]月[illegible]鶴の鹿、　曉岩
[illegible]山[illegible]、　佳夕
[illegible]、　素砂
[illegible]、　文賀
[illegible]月[illegible]、　其水
[illegible]秋の風、　小寛
[illegible]切[illegible]、　元沈
[illegible]声、　文宗
[illegible]月[illegible]街[illegible]風、　曉餅
[illegible]山[illegible]面[illegible]、

橋前代 橋白妙 紀の馬 [illegible] 九江
七夕 [illegible] 橋乃 [illegible] 曉雨
八重霞 寛代 音 [illegible] 市川 連枝
かしこ 酬の [illegible] 牡丹 [illegible]、 東水
竹の風 古々代 [illegible] 和流
稲舟 [illegible] 田中代 小 [illegible]、 蛙柳
毋稼 [illegible] 月 [illegible] 近水
庫町 [illegible] 信吉 自耕
春 [illegible] 故人 [illegible]、 [illegible]丁
[illegible] [illegible]、 秀竹
風雲代 稽 安 [illegible] 尚故

[illegible] 天来
[illegible] 八百助
[illegible] 若助
竹 [illegible] 先 [illegible] 日 [illegible] 楚泉
柳 [illegible] 各 [illegible] 硯舟
[illegible] 上 [illegible] [illegible] 子宮
簾 [illegible] 竹 [illegible] 成蔭
和 [illegible] 稽 [illegible] 鮮舟
[illegible] 越カスガ [illegible] 蕉貴
川 [illegible] 下竹田 [illegible]乗
行 [illegible] [illegible] 田 東鯨

蛇ぬけの柚味噌の釜の新、　遠山
[illegible]　吟秋
橋爺や孫を抱いて[illegible]、　田宇
大和[illegible]の[illegible]　武州[illegible]　堤城
春雨や[illegible]の[illegible]、　[illegible]谷　桃笑
山雲に[illegible]あり雨雲の[illegible]、　福谷　喬居
行燈入れ[illegible]、　人見　一圭
陽春[illegible]水の上り小[illegible]、　青徳
初[illegible]、[illegible]、　桂之
[illegible]に[illegible]一[illegible]、　[illegible]　東中
竹も[illegible]　後[illegible]　一牛

[illegible]を[illegible]、　文之
又[illegible]秋すてりぬ[illegible]、　仕孝
世に秋入[illegible]世す[illegible]花、　[illegible]　宵中
和[illegible]潜[illegible]小[illegible]、　[illegible]　汲文
[illegible]通[illegible]　人[illegible]　[illegible]　楷唐
行春を[illegible]　[illegible]　[illegible]　蔦山
青簾　行[illegible]自[illegible]、　[illegible]　[illegible]
一つ家に[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
尺[illegible]　[illegible]　[illegible]　不[illegible]　幽山
[illegible]　[illegible]　[illegible]　八[illegible]山　常春
[illegible]　[illegible]　[illegible]　芙蓉

翌は あすの日なき島　カノタ　米雅

笛舟や雲吹つける秋の風　市々

遠くきゝし名月の萩寺、　素友

来たりに露の木のあわ枯ず　綾愛

常や紫は女郎花も見えし　素雄子

今さき来れ妻定まり　フカ川　浮月

秋風や胸につかへる笠提山　越　東鳥

菊酒よ里枝は露かゝる露まり　前八　語嶺君

刀豆や他人の見ぬ寺境　ゝ戸　桂娥

指るむて菱家田の新蘿の　乙木吉　渕氷

秋まで掛てそよのせむ風の影　柳直

夕つく日寂しき張の栗の影、　雨ヶ谷　七友

長きさの比よ萬の影、　上望　晋白丸

小春川砂や白雲は清律り、、　勝保

薮今きのらしき解ず、　雨ヶ谷　弥月

年くれし恵方にえくし隅田川　ゝ戸　竹道

風乃振刀豆は露の着身、　香綾

かりそ見乃さめて柳の家の月、　北元

思ふまゝに行信麻すゝき　信本ゝ　宗二

雨雨の別し小袋の葉墙、　平松　昌曉

橘子もちるまけしの瓜　大坂　石路

山路や郷子なりしとの借しさ　アキ　篤老

山茶花や寺乃行事のまつり哉　ヒタチ小栗　眠石
志ら雲乃手前を融よ白拍子　湖巌
梅あらば心なき海士乃戸口哉　クミヤツ　月浛
舞姫子や春を先立人清しき子、　小田　壺仙
捨舟て水之遊び朧月夜哉　元暁子
秋風は行先ありか萩の声　江戸　抱儀
略を次まて
寂しさも悦ぶ寸時や果子ある、　塌亭
かくれ家や縁の端乃男かな、　寥松
馬とめて雪も雪一面ある、　其雪
二百二十日るるいるやかれ月夜哉、　仙路

牛は浪を見るや鴫生、　元風
樹のうちあまのそ浪のうみ　クルメ　与山
湖を前ましく山は二月乃雪　イヨ今治　其梅
るまらも足も花を寺乃しし　セカミ　楓之
福川や星のようは垣乃糸　チマフ　巖松
嵯峨あそぶ山や春は一日、　元民
山吹や谷は床しく花の糸、　西道
常にゆく越の箱根山、　雪羽
年忘ふ人人をまうり時雨かな、　文艸
又月見は柳か伊や西の空　江戸　菊山
山寺も手すゝかるまれの春、　櫻莫

梅雨 蒼きこうり此 十日 三、 万里子
梅の実や 素性くさき 蔵の書、 氏玉
素性沙門かな みて出る 、 喜山
あつたれする 行雲 雲こうの事 （赤松加護） 茶寛
若竹や 俗人此ゆのぬ 隠居道 （ハヤ） 仙瓢
清き 日乃 塵子 我や 春婦 、 庫春
四方を 蓋うこうこ 、 菊兎
数を 寸木 数此 雲 （越前白町） 知賀
乱 無乃 雲と 九春 星の 雲 、 李朗
京 憲う 多を のこ 山かこ 瓜 、 （ヒヒ） 三枕
夏 渡の きこう 言八 月の 弓 、 （搭乗） 以文

蓋の事 服ヒ 有る 梅の事、 （須京） 一松
眺八 物ヒ 粥乃 天 宗 数、 （小名） 近秋

清風杯酒 燭 登楼 倚 檻 婵
娟明月 浮下見 滄江納涼
容 軽舟 短棹 画中 遊

帝一さ乃こ ちこ 有る 秋の月、 （マヒコ） 可保留
七夕 入 素や こ を 貸 こ ま る、 （岩イ下） 紫山
一リ 雲 や 雲 分 雲 荒 し 萩の 風、 、 雲月
雲 此 素 や 関 ふ き 白 陽 の 賣 こ る、 （森代） 障水
こ る こ 素 に し 梅 分 す 梅 ま こ き （ヒ門） 魁人
浩 て こ に 小 萩 こ 雲 の 一 葉 （ヒヒ） 芝山

杉の木かくれ人のかよひ路、　寛山
行儀よく雪よりすゝ咲ます、　寛凡
潮の音不の咲ぬ谷、　寛笑
竹の小雪ちらしなきさかり哉、　寛志（田家）
橋を舟ぶやまけむのよき蔭、　寛雄
九月雨の山路の秋おもし、　孤長
うら枯や雪ぬくもり蔭、　寛雄
吹通る東風大寒の舟ぐこゝ、　鄙楊
恋しき夜遠郭の博の風、　九華
杉人の手元ちくもり也、　杉卵
水音やいさよふ一かつゝ石、　寛雪

一筆ちるさまもの仰ぎ小ふの月、　天燈
ゆくゝ砂運ぶ手の月、　湧陸
名月や九条八条北四今めく、　不凹
名月や杏ち新ぬ、　車九
糸窓ち頼よ古ぶて来ふの月、　孤凡
九月尽二日春のる、　宗山
胡ちや雪北留け手殘、　久山
高野や扇の軒ち舟北忘、　行水
落葉入谷ふ沈ふや昔　梶、　古窓
蓑時や月不去ぬ一湯の蓋、　卜春
鑓田ち雲蓑迫ふ二日の月、　指年

暖さに ひらき寄や 竹の子　越シツケ　酔舟

二人 涼む 氣ぬけ 竹 簾、　ワタ　石菜

秋立や 実入 花 月のおよぶ、　武川　環山

ゆまる 寄る 春 ゝ 更 笑 咲　上ケ於田　毛々

初月 乃 声 帝 さ 寄 徳利 酒　江戸　理堂

今 桃 ゝ 小 寄 ゝ 震 かな 寄 ゝ　チ、フ　嚴松

降 ゝ 陰 ル 重 ゆ 乃 重 あ ル 去　信平出　晋丈

鳴 ゝ や 花 宮 ぬ ゝ 法 師、　今年礼　梅意

行春 乃 寄 や 百 寄 礼 胃 川、　真俳

梅 ゝ あけ 梅 ゝ 氣 て 長 考 式　越シツケ　爽亦

きぬ ゝ や 昼 も 八日 乃 鶴 の 声、　小代　古連

朧 礼 り て 月 ま ち 山 ゆ 寄、　浜村

寄 の 月 き ち ち 寄 の 寄　江戸　寥梅

秋 ま ゝ い ふ ゆ 月 入 ある 鳴 ゝ 寄 鈴、　味月

て ち ち ち ら ぬ 朝 ゝ 枝 暑 ー、　涼声

月 ゝ ゝ ゝ 竹 の 庵、　墨立

暑 ふ ゆ の 月 あ 品 竹 寄 島　房ヒロ　重虔

老 ゝ 朝 月 て 月 ぬ 寄、　青蕪　鄭重

月 礼 寄 月 寄 ゝ い ゝ ゝ 寄 冊 木　越ミツケ　支雅

涼 朝 や 橋 か ま ゝ 月、　ヨキシテ　流慧

鶴 鄭 礼 月 す る や 竹 の 根、　九ノ子　春月

青 梅 ゝ ゆ 秋 楽 礼 日 義 ゝ ゝ 寄　イヨウシテ　九桜

蕃橋ふり来る袖つゝ摩耶子　乙調
玉井戸を問て家居人まばら、　文挙
短冊や色もしおれたきもの　行徳　東几
俳諧まなびとを学や青あらし　仙大　固秀　天〻
いくさよの春は暮ふ一の山　京　月居
秋のゆくちり屏風　江戸　九女女　紫園
蓼〻〻井の水すゞき桐の枝、　曾石
蓼風ゝとり少あり　遠雁、　抱儀
初鶯や春を箱根を越てより、　攻柳
雪はれて春ゝ山の機の音、　士光
夕煙ゝとも白ゝ、　英清子

原古る乳を春ゝと呼ぶ仏し　信　白新
老ゝとも花ふ逢ふ人り　弧　杉亭
原古る呼けや庇ちきゝ臣の木　ツシマ　曙堂
赤ゝいゝ旅ちあくふゝ玄果　江戸　舜美
旅人の扉ちうれ石二詰　アキタ　御陽
拾ゝ雪四きゝう降ても清ゝ、　小雅人
門返屯鶯ふゝしゝ石をゝ江戸　一蛙
石むのゝと夕日の赤ゝし春の山　ヒメチ　七友
心あゝ大ゝも暖ゝし春千青　江戸　築車
杉の根を鳥の鳴ゝ　チツ　巌柏
蛙ゝたゝ石を持ゝ春代　仙　糸地

[illegible]　本庄　幽山
[illegible]　作十七　彩里
[illegible]　春翠
[illegible]　西陵
[illegible]　江戸　元風
[illegible]　元曉子
[illegible]　元雄子
[illegible]　武　掉院
[illegible]　桃笑
[illegible]　久八　独柳
[illegible]　江戸　九文安　紫園

[illegible]ける　杉杜
[illegible]　茶寛
[illegible]　イヨ　其梅

[illegible]

[illegible]　仙台谷　春潭
[illegible]　江戸　紫山
[illegible]　陶谷
[illegible]　子將
[illegible]　元三子
[illegible]　士先
[illegible]　窓梅

[illegible]月のまとゝ[illegible]
一枝ゝ[illegible]ふ見れば夕 橘　信濃　梨月
月入て[illegible]もあき山を隠[illegible]　洞弘
庵の夜や橘[illegible]秀よ[illegible]く嵐　江戸　有磯
[illegible]紀友時の[illegible]　翠羽
[illegible]ゝ[illegible]　越　孤月
[illegible]ひの木芽代　信　南昌
[illegible]麦や西よ延[illegible]　南山
[illegible]　半石
[illegible]　魯川
[illegible]　女史　清子
[illegible]　江戸　枯芦や雪の中

[illegible]の[illegible]を敲むもさすらふ　抱俤
[illegible]ひらひらとぬる[illegible]　行脚　太橘
[illegible]ちさゝ草代　江戸　雪笠
[illegible]　太節
[illegible]　アキタ　秋窓
[illegible]の遠[illegible]　大坂　長齊
[illegible]世界[illegible]　江戸　冝麦
[illegible]の[illegible]ひ[illegible]　京　雪雄
[illegible]春[illegible]　大坂　井眉
[illegible]の[illegible]　屋鳥
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]の山
[illegible]二[illegible]中[illegible]日[illegible]
[illegible]ハ[illegible]の峰

人の来て又稀なる美しき牡丹　ワシマ　曙堂
湯あがり　服さ一色にて　、　東指
ふむものきゝ　ミ九　寄杖
石よ　越　壺仙
清湯や　イヨ　其杖
花をもむ　クホタ　青蓋
まゝ子や　アラミ　千紀
薬よ　京　菱虫
薬又れて二本　パ戸　椿
朝日も　越　寛也
出ぬ嵐　江戸　杉亭
ひとり　應壺

海棠の高や　孫助
さく花や　樹の
たらある　子將　フカヤ　貞秀
形も　江戸　一峰
いつ　、　寥和
海棠　、　桂水
尾寺ふ
細さけて
さく萩ふ
庵ひて
ふる
海棠
、　塊亭
、　峰月
、　窓杖
、　蝶竹
、　東雨

高むまりて　梅の花　江戸　汶柳
揺うけて目移りせぬ木の芽哉　越　南岳
木乃市　袖ふかうさし　春の雨　江戸　子愚
外山家　みよの宝紙　宝庫乃　仙芝
毛敬の　家ふ花　牡丹ハ　浮月
て　新の　ひらつふ　新し　雪解哉　公石
梅柳　密〻　力ゆる　朝日うる　細水
明新を　ゆ　月のきり　哉　芦葉
菓子　〻　ゆ　〻　金車
面白　招　目も　春の雨　士先
其の　雨　服の　色　孫　チウ　鼎杖

萬種庶頭中　西風声裡塵

花ちる　ハ　皆　荷　萱　ま　ぬ　へ　し　茶舎
家を　安　森の　月　ふ　居　向　喜山
埼　毋　大　工　望　逢　鏡　仆　里九
行の　羽　織　の　毋　ゆ　ふ　ゆ　新　丈　舎
白　鬱　鬱　の　蔵　毛　さ　ひ　く　ゆ　先
泡　の　差　蔡　ま　蔡　ち　く　成　山
但　る　路　ち　き　ぬ　人　ま　ま　ぬ　九
家　ま　時　の　ま　ま　ま　ま　ま　舎
琵　琶　抱　ち　抱　ま　ま　ま　ま　山
琵　琶　抱　ち　抱　ま　ま　ま　ま　九

編戸もさしぬ宗湛が茶

簑笠の乞食二人ふ葉を焼て

貪利貪欲を食尽て

片町八百屋なける月の秋　舍

寝を形し園もひくらう　山

秋の代を何もて盛一日も　丸

ふ起せしと蕉雨集ふれて

鍋蓋もふれ取恵の自ら時　舍

扇なりけり　磯乃まこと　山

九

東都旅窓

杜宇　独楊

杜鵑ふ更ふりうり

ふ蒲ふくれよ呼ふ　伊丸

麻地白皆ふ鐘ふ聞て　芝山

何ふくふ中ふ茶ふ節ふり

雪の雪ふ雪ふ枝ふ全ふる　楊

泥稲ふくさき叶ふ月の月　丸

萩刈ふ稲月ふ逢ふ八月て　山

秋ふふ秋の雪ひくらし　楊

ちふれ切ふふ逢雅ふ石ふれつ　丸

山

きくれば春日よりは肩ぬりなる
に箇の島ぬ先なる花かつら
西条つくらとつちくれの峰　楊
燈籠の花ゆよりし月の影　丸
地蔵ゆゆ浦むきもの　山
白雲を旅商人の名ぶ呼ぶ　丸
御去ぬり紙絞るゆ紙　山
蓑虫の鳴ぶたれ一坪の花　楊
荷ぬ生まれる度蓑の能　丸
山

老懐

秋おろう泥の田螺ふくみ　民玉
塩ゆ筋ぶ　何丸
乗物の乱れて美を逃すもむ　玉
響く鹿ぶ　丸
内海ゆ波を高き西風　玉
花ぶ人ぶ柿一めゆ　丸
月ぶ古ぬ泥ぬ秋の環　玉
笠ぬ雨ぬ月ゆ村雨　丸
ぬ秋ぬ稲の穂の銘　玉

楊枝ふきくゝ落涙を歎む　仝
墨染に物思を重ねられて　九
雲吹うちする門の明くちち　玉
時雨るゝ〜ら前より明捧み　九
物たるうに離さしけ筒　玉
風木員ふ人の命よりくちる　九
懸命たくゝ花の世語しき　玉
久方のあさき月日よ郭れた　九
筆陳ひくゝ物よ語のみ　玉

源〜ふ和鑑氏物のとり色し　元風
樗よ合歓の咲うるる　伸九
墨蹟ふ色敵よ孫や直ふん　風
鶴ふ色ふ鳥氏ふ稼畑　九
糸修ふ書代ふ鶴さるよの良　風
鶴帛の香よ狭き山に　九
豆腐ふ秋の墨さをとふけ　風
雁をふ月氏弟の剣ふ終　九
穴のある傷を小ふ書ふ氏ふ　風

鳥一トの人ゝ世を
水よ西をさゝやかる庚哀　丸
みさゝ尾茶しるる色う光　風
待宵ゝ行水伯藤ちやく　丸
ゆるゝすゝめすゝの影のうゝ　風
跡先小角茶鼎乃殘車　丸
菖蒲花ゝ　おも端籬　風
入ゝ傳屋踏きも花ゝ　丸
まゝうをしき曝ちゆ　風

良秋破魚のあまを
拂曉の仕体をゝ付永　若海
名の月ち鈴月ゝ長き竹の雷　仲丸
鶏ゝ義をゝゝ根ゝ　海
世ゝ乞紀羅中鈴を奈西ゝて　丸
ちゝゝゝゝゝ稱る篇作　沛
流ゝを柳ゝつける汐港人　丸
桐ゝゝゝゝひをむゝの新　沛
藤衣徳寄山ゝ茶ゝ　丸
梅月ゝ月のゝゝゝゝ

[illegible]ものすさまじき物なれど
荒磯にうちよせられ
蓋彼へ古酒を飲る釜の明
八幡の鶴ゐつゝく産まゝ
柏の名も唐めかしたる月の者
唐苔の膏薬尽しかり
山田吉俊翁の身もたくられ
紙を張る里のそよめき
いとちかき本の宗好も老盛
物をかうつ寫舟の唐

海　
尤　
海　
尤　
海　
尤　
海　
尤　
海　
尤

楊弓のあくりゆ[illegible]る事風ふ
柔[illegible]の[illegible]をあやふみ
粉を舐る表太り島子重造
自由[illegible]る鯛の加賀
聖衆の[illegible]人は隠れり
温泉元の自[illegible]山海乃水
屠苏紀梅の美[illegible]
[illegible]の勢りと[illegible]梅と扇
う紀幸紀[illegible]女の[illegible]矣

仝　
海　
尤　
海　
尤　
海　
尤　
海　
尤

五葉草　の葉ものこるに
雖伝牌ふるく月のさかり　光
芦の穂分るに毎のあらし　汚
冬籠の窓よ全き機の音　光
蔓は易てたるるに仕　汚
今宵の人は庵に冥乃蔵　光
橋のころよ伝のうめくらむ　汚
世の中や下戸は八下戸の家久　光
徒然をよむ事のつれく　汚

彩ちゝ見しゝ和尚の彩波り　奥川又　東旧

やゝと出て中よりぬれし葉の日、　暁里

扇を使めゝしを五月雨、　寿山

涼しさを押せる身の戸口より、　金店

赤よ布の彩さしたるこち利明、　志計里

梅ゝ香よまゝれて出きし彩の月、　東居

面白把ゝよりて花の蝶、　緑毛

凡ゆるそも遠浦の朝をみ、　東其

夕風のちゝも知るゝ鴨の脚、　雁四

鮫ゝやし唐をしし杉の月、　詩九

夕山よ日和かゝ作くゝ弐　赤旧女子　歌

菓子や梅の一葉も門の麻　江戸　杉人

富の戸を明て中よりぬれし葉の月　タニハ　胡楊

家者ちゝ家家も余の木の葉　アイツ　如髮

時雨ゝや二反ゝる花の心　仙矢　跡玉

嵩太郎ゝやゝもみをつし、　扇風

子め彩ゝ彩ゝ行る四楽　アキタ　里曉

ゝ雨ゝ降出させ雨ゝ雨　元暁子

故よ恋をゝ見れ中ゝの陰ゝ　嘉雄子

直新の赤ゝ見ゝ長ゝ之　江戸　吟秋

寺の夜や嵐のゝ行れる夜ゝ　一九

秋の風世ゝ行ゝ中ゝ　本庄　幽山

行くとて咲ふものの花梅ふ月　江戸　旭菜
萩を来る人の心や花の塵　、峨尽
雅楽の神今ふ神迎　、窓梅
初潮や乙の沖の汐曇り　、看之
夕立の過て地よりあく雀　アキタ　御風
見渡せば遠ち山の春　、渭南
夕雲ひまるや時雨の嵐山　ヲハリ　岳格
白あやめ咲いやうきよりの人ぬれ　大坂　芝彦
春風の中くうりの花　、采彦
梅咲や馬あふりのうらう来て　、徳杖
おくれ来ぬ我よくうり美人桃　江戸　芝山

拙ふ〻猫居ふ〻り立寒ふり　、芦雅
自然ふものの〻ふる枝ふし梅の花　、蓁〻
古稀未学の蒙ふもをとりの色　ナカサキ　幽晴
白あ〻ふ〻宮ふ〻家持つ松完民　ハコタテ　布席
柴の戸や若草ふ踏〻ふ来る春　本文　冥〻
春の風月雪花乃先ふ〻ふ　江戸　一斉
花の香や梅よりふ〻ふ人ふ〻ふ　、国甫
ちて清民やふ〻ふ行ふ秋の際　京　梅價
涼ものよりて尺る信も秋の味　信　昌暁
夏笠やふ〻ふ雨ふ〻ふ言　江戸　元風
藤沒蟬ふ小宮ふ〻ふ一人の聲　元雄子

甚寒寺の椿咲ける海山さゝうふ　ツシマ　曙堂

只咲て以前の海山さゝうふ　京　定雅

実久し　椿八花のうゝおもふ　アフミ　星秀　志う

山里ゝあつてめ房離別の話

もれくゝの中ふ秋ふる本城うゝ申　朝鮮　朴徳源

長山青旅泊二句

尺くゝ屋ふすゝ花ちゝ橋ふ　劉士元

月清し　後ろふ古毎る釜山海　沉負山

屋ふ絶ぬ音くゝ　瀬清水　京　十丈

雲原の四方ふ尾張ふ　元曉子

西くゝれよ高麗の音や夏の先　越ミツタ　宇弘

皮剥ゝ新版ゝ　柳苺る　周防　行脚　昌我

枝着の光ふ春雨自ひ式　イツ　巣鳩

世業のいゝ海あき式

新麦の音ふ世の音ふ　アキタ　可負

家指て萩ゝ見ゝあつゝき　京　其成

新緑も木槿も同一西の京　アフミ　烏頂

湖辺ふ月れにゝ　タニハ　牡柳

百反の蓋の香ふし　江戸　翠羽

秋立や心淋ゝき乃巣　アキタ　涼風

抱上ゝ子ふ新麦ひゝ新あやめ　江戸　其雪

旅日記ふゝ書ふし亀ゝ蘇喰　隅田丸

山吹の影を面はして鏤の如く　江戸　士先
雪花降る夜よ明るし萩の山　大坂　鶯雪
膏杉の沙を穿や杜宇　信　白府
夏衣今こそ濡せ雨もよし　万里子
蕉風乃尭も摩耶の山　庄内　牛山

大和川にて

川毋に年を洗ふや杜宇　江戸　蟠亭
吹鼓鳴くく夜も伏くく　大坂　魯隠
星ひとつ行く秋惜川の走る哉　阿波　隠谷
死もさるの声聞くや秋の暮　江戸　菓鬼
淋の言葉歟乃ち夜よくけ雨　女史　清子

いちき石紀行
茅橋のたゝ仕るや月過
きぬぐ行く人さく秋の星うか
宮路やけらうち秋の小家
夜の夜や有明よる月ふる
茶芒ひろ夜月萩よ茶ふり
御持ち久〳〵や梅よ茶の羽織
山人の来ぬ日ぬけや霧霞む
杉風の屋さく〳〵ふる草の影
いつこう夜毛抜月を苔乃うく
山寺や星数る夜をいつよ春

抱俊　信　自耕
其扇　アキタ
玉屑　ハリマ
元風　江戸
元曉子
茂推　サヌキ
曙堂　ツミマ
寛也　ハ戸
申府　アワミ
茶雄子

はたごろも　信　乗地
あるすの時雨なりさうふを扇　、　子寅
切掛乃墨ぬも春の匂ひ哉　、　斗石
山乃の一筋あるる芒う哉　尾張　一簞
玉風やすゝ屋の杉の月　イカ　士得
俳しうちうち猿し茶の雨　信　魯川
蔵栗殺乃の琴とえてさぬ　江戸　抱俄
古窓ふも稲を苅せる九月哉　下フサ　雨塘
鶏鳴にたつる秋殺るゝ　江戸　窓梅
硝子の屑ようつるや物もと紀　、　嶋月
赤色かされしらを吹うたの冰　越　画陵

蔵栗よ月のく秋りや池乃面　江戸　子常
さびしさ殺猿ぬ桂紫　、　朗亭
捨ち花小遠れむ色乃さ哉　アキタ　民兒
春雨や宿の一乃ふ三ケ水　ヤマト　杉寿
蛙声や雨の養の人よつく　行徒　東九
風ひろき麦の系ち平ち陽　ウツノヤ　暁鳥
流ち庵や壺ふかくも磯の鍋　大坂　自乎
夜の長メ丁来ちて吟ん色　紀子　桂九
小峠嶮やあれてもきを梅ようる　江戸　文桂
山ひのう四十八瀬や鮫ふく　、　霧美
そとりとも志ち屋ぬ杉や怪の芝　、　暁年

行末せる沼水や秋の蓼　ミカハ　卓池

難波田乃社頭

実橘の粒〳〵きよく新の月　江戸　蟾亭

風吹も紅葉き榊の姿来る新　化成

る廉貝殿はよあの母や美の尾　子將

蓼や亟月乃えりもの之　子黄

裏面殿えそ色やえよあの稲美の山　抱俄

梅樹〳〵変古忘れぬ更海氏　ミカハ　秋峯

山のえりあ忘むあえれ義　元曉子

猶食殿蓼小屋切りし氏　江戸　佳夕

月えし誰すも庵そ笙の吉　庵砂

埋火のにや牡丹殿咲えと氏　仙大　士由

ちりたゆる橘屋殿やあの高　俳ツ山　李朝

本えけも京桂時や底の月　江戸　変清子

明月や俳〳〵きき殿月より　九女安　紫園

二日月殿西学より晴し　元風

俳えふぬくひ女もえ美えり　イセ　椿堂

新えの有明月や懸の庵　江戸　紫雨

えく〳〵日新うけえる新う邨　杉蟻

西芭蕉や旅のえきもを毋り　詠序

一日の汗清湖えを氏　其水

るつえ〳〵樹ちえり亀美の山　小雪

ゆるる色き、栖ひてゆくえ
梅ゝ香や古屋の人は笑ふ　越　杉亭
春もすがらのよしてゆる時雨　信　南山
梅をくる心よ巻をあらうらう　キヽ　ゆ根
夕風は吹てひそかに書のあ　、　因山
猫大よ一日寒るや　、　八戸　文也
夏虫や昆陽野くかるゝ小枕　、　志摩
　菊川よて　元雄子
夏菊は秀絵長生のたもあ武　江戸　蝸亭
春雨や洞代笠さ人ひ　、　抱俊
ゆくそゝ　梅ハ月の的ゆ　信　兵地

陸くの猫ちくくふ梅の蔭る　奥　西河
羽織をくふ氣よ寒くる柳ふ　江戸　元澄
黒猫のあくや彼乃板庇　、　星秀　元江
新魚釣や　祇山乃日ゝ　、　暁馬
猿の顔ち出し　紀公　越シヒヤ　丑文
去ふくまよ酒あ后の月　江戸　霜美
汲立の冷清　、　旭茉
人くる毎よ夜毎小ゆ秋の月　足利　志政
昆崙の猫深ひ東　信　宗二
紅葉や　うくいひ明の綾　、　平石
ふ房やたゝ明れ世ぬ傘の骨　フムロ　双門

山蔭湯よ夜のとりし初陳　フカヤ信　貞秀

腰ふとき影のつめたき雨　下サハ八日市　魯川

畑打や箕ふる欲なく人　江戸　麦雨

魚捨て海ゆくなれば秋の雨　久滅

曇れる山を吹くも秋の雨　理堂

四時多花月の能乃教はせし　里秀　暁春

ちるとなのさいらアしと砂まれる亀　行脚　久幸

不二ゑがしきのみれば春の又ゆる　雄嶺

芦の穂中戸に秋那く梓巫女　元暁子

吹くと月刈のけるゆふ民　江戸　抱俊

高ほ山で笑やふるハ言のとも　秋子　李峰

筆や本当は河りもきのふ　ハリマ　文卿

木陰寒る渦ふさやや秋の月　江戸　文谷

渦うけて苏ふ切ふ蔵ふ　フセン　暁舟

そそふふふふ秋もふ中　柿後

河代る春よ行ふ日を吹くふ　ハメ井　秋香

芋よ入怠ふ名をとられ年雅時　江戸　民玉

世の時や人より出き菖蒲ふ　信イ十　蘭齢

出家や秋も海ふもふあふ　八朗

古根引自慢ふ連　男童　自耕

立ふの邦ニノふ　越　汝来

俳風ふ多ふ和ふの庵　画陵

[illegible]
小夜更く千鳥解や琵琶後　三カ八　江戸　翠羽
小ち門や夜の琴乃削うけ　上ヤ　里九
一日ゝ節も不れすなれ萩　江戸　白魚
三百月や樽下の富よもぎ分　信　元芝
永き日や面白くもある夕ゝ　アキタ　武曰
池の上も悔の残ふるり　アキタ　丁負

閑窓

安倍くらみのむしゝ二人武　江戸　抱俊
栄清やいつも中ゝ紀里の人　武　文冥
悔ふ迄富ふ人ゝもむは手物　、　茶寛

三樽ゝ出てゝひゝ初時　アキタ　可負
羅の花白よゝき日傘武　江戸　酒女
秋風の切筋ゝ波の泡　、　九雪
戸ゝ夕ゝの清の雨よゝ　、　万機
百羅や重ゝ織る小袖の山　、　濃恭
日の南の音も寂る千葉武　カ一クラ　棋庵
京八月も今しし西山ひゝし山　江戸　杉杜
むめの花咲をあやゝれやゝく　、　利勝
烟草の屋よつゝる藁家ゝ　越　南長
雪ゝ月や降ゝおつゝよ長ゝ　信　其僕
梅の花ゝ折よ物ゝ有ゝ　前ハシ　峰峨

大鵬丸花はやうるしみそさゝる　下サ　梅蹊
白玉や西の庄なる梅の花　江戸　蕉雨
学ぶ笑されさうな梅の車　〃　鄭田
さゝら花ハ特しみふきハ又樂し　ミハル　春山嶽

なるゝうの別荘にて

落葉のうやくちまよ古抱る　江戸　霧美
垣越て花さちふむけ人の菊　〃　九文女　紫園
第よ日を拾へ菊ゝ沐道　〃　東雨
巣鳥のうゝれて鶯や鶏月　庄内　牛山
さゝくの苦ゝ新ゝ有ゝ苦の地　大タテ　九知
青柳や人よ吹ゝしてるの巣　〃　墨翁

浜山茶とそてハるゝし辻の花　江戸　青阿
一二本月夜乃中の芒う南　下サ　三市
逃れても又巣ゝ惜のゝつきぬ　二本ハ　渕水
一立夫つゝ毎るゝ花や夏乃惜　ヒタチ　湖嶺
朝や耳ゝ　江戸　抱俄
毎るる日ゝ窓よ泊りて蚊帳哉　〃　菊花
芋よ苦ゝ青茶よゝ森ゝゝ　〃　九友
ゝゝみ切るゝゝを白ふ蔦蕭哉　〃　佳夕
人の泊ゝ花て泊や宋ゝる　〃　万機
ゝゝゝより泊未むゝふ新哉　女史　清子
毎ゝゝ毛のやゝゝるゝ哉　松仕男　吉ゝゝ

如減してあれば中秋の
一ツ家の月をかれハもろ人猶の至
明星ハ時ハりよりをしと夜ハ立
酔のうつあるもふかのもあり竜
杜宇ハ時やひらけし玄門冥　房州　貫風
山花や四十々十の春ハ老ひ　アキタ　渭南
鄙酒や利根の夜雨漕船　江戸　士先
辛崎の松ハ下もも横ぶ　黄隨
京ハ京の白ひとくり辻ふ　其雪
夜崎をみふあ鶯ふ多の岩　可蓼
頂百ヶ山ハ松のあるの辻ふ　北園

菊二　アキタ
有交
涼風
竜乗
貫風
渭南
士先
黄隨
其雪
可蓼
北園

宮ふ社番へ人ハ出さのふ春明り　江戸　杉仮
三株孫ふ合をて人命ハ時鉦鉤　杉住
雨ふふもふふ雨ふふ雨ふ雨　作　秀中
蓋棒関ふて玄し　モカミ　楓二
秋の月ふ傳ふふみもふふ亀　上ケ　毛く
月孫ハ　ちふふ　アキタ　乙調
学ハふふの孫ふみやふ中れ者　ツシマ　文拱
初雷や初立大名の船ふふし　江戸　曙堂
見ふれふひふを作や寺の風　元風
寸苺切の服装山作ふ入れふ　士先
ひふ蓋ふ老葉ハ月の如やふ弐　心張

宮ふ社番へ人ハ出さのふ春明り
三株孫ふ合をて人命ハ時鉦鉤
雨ふふもふふ雨ふふ雨ふ雨
蓋棒関ふて玄し
秋の月ふ傳ふふみもふふ亀
月孫ハ　ちふふ
学ハふふの孫ふみやふ中れ者
初雷や初立大名の船ふふし
見ふれふひふを作や寺の風
寸苺切の服装山作ふ入れふ
ひふ蓋ふ老葉ハ月の如やふ弐

三井の清厚ふかたうかうり
ちらりく雪と落をて清厚郎
源風よ為れて初よたる墓哉
越
栄の之枝木の之さうり
、
杉風の袖よたもりし帝哉
江戸
花咲
古月やつくしてくる程山
房
雲渓
法師ちる芙蓉の水もまた
、
如雪
汲来の水もまた清やうり哉
九ノ
与山
思ふ心ちうつて源しさよの先
伊川女史
木
ゆるふるまふ佛の前や鐘撞
江戸
文賀
夕暮のくうろを切うたをう鶴
イヨ
其梅
元暁子
元雄子

雇りて七日のうち清厚より
因幡行脚
寸阪
陣屋の中に松橋のちりよりり
上ケ
芦邦
母の新墓して萩に白樺
江戸
雪戈
杜宇鳴ける和歌士の墓
信
白斎
むく高楽帝のめ雲巳り尤
素雄子

死生有命

如何ぞ鶴よ問ふ月うよ四十雀
女史
清子
頃よ于氏を掛さうを郭ろ、
イヤ六
国村
後ろく角ひくうり揭牛
アキメ
其扇
風ぬやむりより雨のすに紙
武
桃笑
希薫の移世よあるや蔵しあ
江戸
弧山

一つ風音の天やく船うたふ　江戸　若海
雑の墓よりちる花うけて風遠
枯墨くる蔦や山を引よせて　千住　某山
時雨墨を書　武蔵国秀　加茂
雑炊墨を書　武中
雑炊墨をかく　、　椿庵
雑舟よ魚のつれたつ時雨哉
山茶花よりしく日の哉　本庄　幽山
向ひ合て雪の降る夕秋の山　江戸　吟秋
屯駐系人の行くる日のあるを　、　寒雨
供ひ　さの形遠ひ　越　知山
ちる柳やちりはハらき秋の風　長崎　五雲
茶の つるむ中小梅は磯系哉　江戸　一風

あの隙よ心ちよ蓮の花　冬ゴロ　万籟
風の香ひ清し　越　可保留
実ちとひろつよ起元雷古寺　、　知山
降雪や三十日の朝ものそ　、大木六　和柳
西厚ち行先もちあきたる哉　、尼田　桃夭
白魚ハ波の花ちれ朝日新　、目黒田　玉ひく
心屋ち雑よ時ちり秋の空　、万条　如拙
異ち月や能ち拾あるく落子賣　江戸　言山
西蔵や多形ち雪よ為る夕元　、　亀石
ちの海ち中よ雑ち中寝ち　、俳石東　啓義
ちの波ち百ちく枯け如秋の風　、　盛之

満ち残く栴檀のくちも哉　江戸 砺石

庵しおしまふ二月の椿かな　サツテ 二双

虻の來於片隅へ夜をせんめぐり　房 東翠

覚らまよそ手頬たり三日の月　小金 篤龍

よふつけて恙ま巨燵の出ッ入ツ　大坂 竺府

饅汁の味八ひとつ八隣り小屋　江戸 公石

冬籠積る莫とか八ちかつ庵　アキタ 御風

窓に歌紙閉ちしやこ鉢の秋　渭南

芳ほしき人さすま八木綿　信 一茶

霞まみまく濤を見たり　子寅

引れぬ夜の紀念や屯苙　志名井

杉亭の夜坐

月細く葎の露の流れ見え　才雅
胡坐の膝に進む虫の音　杉亭
米瓢ふしぶる者をおせかや　宇弘
さひし此宿の立てられたる　蹊斎
牛の背に斜日影の照らし　亭雅
朽ちに雪のさらさらと吹
碓を枕に搗る破れきせ　斎
つらに草しり芽を悔むらん　弘
北濱に人気の揺き和きて　雅

ちやり牡丹を賭る 穴一

蓋盃の跡りを雷の気ー

扇を ふる水のすきまし

寺を作む心ハ清き秋の月

ゆりの毛ぬけつらむ華

蓋ふるを絵角かこの 窓 衣

几中やりすこし雨を音業

花盛り矢の業を庁猫丁

かくさんを書てあるを 鶯

亭 弘 舟 亭 雅 歩 弘 雅 亭

閑口の賓を冷暑を逸る

涼風の田よりあるを聯の裾

置森のさむる帷子の月

凌霄を七日の竹の毛蒙て

秋華 乾ふる火る燒みを

蘭人の 懽 かゝ紀や毛み

杉のちつれを毛の出てり

稲を茶を叶ふ一字の額すて

年を忘ふく秋の愚を朱

あむをつを雪の降を脚ふ孔

俳丸

青阿

万里

逸山

仙瓢

寥和

桂水

菜山

花城

名のみ青く河いなの舞さま
うれるれあれかちや摘る淀達　北て
屋根の鳥の思事報まる
蹴むく鋼鉄る厚めきひ匠り
家るうつの加紀本るくち
癒山の秋をうしろる三年沢る
沢路の路よ胸さ〆くし
ちる花を内侍ゝ袖ようけ留て
さろあもり撫の羽かー

赤雄
里丸
元風
樗山
有孜
雪麦
翠羽
元暁
執筆

雪の松て仕ヒしや百千鳥　伊凡
いろも柳の風　ワうるろ　斗石
黄金のかすみよ春むし大堤　魯川
山ち市てゝ乳を引　南山
蕊壁よ月の横延走ろう　石
蕨のさうをまろふさかよ　川
沐ヒの忌よ角カい延みろ　山
蛇ゝ竜を　伝る川の切ゝ　石
初夏のつよくも残中屋　川

落て流くゝ花を前　山
に敷め手刈の葦よ枝をて　石
佛教の名ら言うゝ　川
有明の月をたゝむ池水よ　山
雪よ向りていいるる　橋帝　石
は秋も遠りと雪に酒の敷　川
年もゞゝ花よりせる藤医師　山
初鶯のゝゝ花を雪引　石
夢もむすめあ惜の春乱　川

採茶菴にて　俳丸

年くよ和尚人間しあ昼の旅
竹よ墨きの流るゝ石泉　万墨
月出て踏しの杉よ　民玉
きの水　牛庵る之　里丸
すくと稼の行よ朱よ　万
清水の赤よ枝　和こ　金　何
然生さひ三社の赤を赤の中　里
雲よ入るを赤くと見る　民

惜の国まかれ迷ひも茶の烟　伊万
雨の水鏡まおかんむかも　民
天雲ハ撓も九くもうへし　里
聲まおかをちこち　袖笛　万
白波のちくく歌も有明て　何
月弦すると啄く山崖　里
著書てもも金をつ花う　民
花ちつくちぬとゝうむ　伊
暦見る松ちおちぬ事の　万
所蒜まよこん雛の長持

上巳の奥

雛の枕かつくく人もてこれ見　紫園
たうちさきに長石八山吹　魯石
協の移り見るきぬ川紙て　抱俳
きのの松陰を思ひ松ちや　浬壹
擅持のうけよ松たる雲の身　粉竹
旁を屋たて庶のるうり　仙芝
栄員て秋の神乃たうし　舜美
松先もちきに石向乃唄　俳
人の方清ハてこたちまよ　石

入梅のさつきしら雨降ぬ俤
ゆりねるの背よ吟ず郭ゝ　竹堂
都をひけてあひく垂れ　公石
物憂き法師ゝ出る青年　芝
ゆよ喧嘩ぬ屋もむすハ　看之
流義すまゆ小金ゆ文　鴉
出れの港ゆ指思ゝ　芦雄
風雅のあれさそ住の墨ゝ　清子
梅津の春ぬいろまる笠　美
何九

月院社帰事　子將

形しく孫者の出ぬ梅花
さゝゆ春ぬ手　所九
双六ゆ彼岸休ぬ振ハひて　將
雪のト清を弥ハ灣　九
薄く清く次ハし流る月の暈　將
有馬ぬ秋の一ゆ　九
鑼綱入る御示の魚の刎上り　將
ゝ紀ゝ所ゝ元彼の新　九
言名ぬ出る清の涼ゝれハ　將

秋よむしるるたの下草　仝
赤穂小浦伊予稙を植迄て　丸
女郎附餅の時もたるさす　将
鶯屋疾疫癒忘れよいろもく　丸
萩食せしる新乃屋　将
武佐邦よぬうの数を赤切笠　丸
あ〳〵よ落〳〵ふき耳ふ　将
山〳〵花花よ角加波の姿　丸
四〳〵花花ひ色の乃筋　将

行尚る音も濁るや春の水　子将
梅の動くを大風の居りクヲ　魚うをヒ　一扇
花迄て月を浪うつ　蛙の子　シタヤ　辰二
春のまのをいそ蔭る樣式　林枝
梅ゝ香ゝ花ゝ香ゝ馬の耳　寛山
舊の春花先ふるあ〳〵山　一得
ちる雲の風ふ咲ふ斗ふ梅の色　石砧
蔵咲を小鶴一ツの世界小　鳥明
ちる梅の姿ふ〳〵ゆ京の風　クウさへ　素明
味ふゆや頻ふ時来皇乃先　寛山
吉せ〳〵ちられて花花の〳〵　石砧

石の明れ水汲刀自や花明り　知足

舟をよそふ人ハ乙女や朧月　秋冬

白臭を不二の煙とんぐ〳〵し　一得

二三ゝを押の丈乃雫の影　子常

子よをうまれて粉沐〳〵昔雛　雨喬

花の枝鶯踏なるちゝ〳〵哉　月川

菜のむかまつ〳〵紀菴の詠　磊石

雨ふ〳〵し隆彦の炭の煙る　庄内　其華

ふい年〳〵梅の旭よんて元〳〵　文未更　双山

むきしよ義合うり赤山　寛山

薮入や梅三尺の物語　聖魯

梅うたおかさの有るもみちうま　アキタ　以左見

秋深く朱ゝて野も軒の鳥　仙大国秀　天く

うつくし月の居りや稲莚　アキタ　田哉

夕暮哉ゝて立ぬ小田の畦　江戸　菊兎

形家や是も人の時石　東金　利中

蛛の出て古めゝ〳〵生るもなし　九十九里　千丈

山水の落葉ふ花落の南　サツテ　不玉

影ゆやふむへの風ハ仏の名　房天体　市交

月清や浪ふてあゝ王柏　岩上合　甫月

朝息や一ツ咲ても秋の竜　イトムレイ　一拡

淺茅生や枕返せも如亭也　梅意

杉くて十五しく朱ぬ世ゝ花　彩大ハシ　吟秋
うて氣の小雨ふ雨ふ花ふ哉　下サノフト　呉山
水うけてゝれも咲ゝ花ふ哉　龜石
秋風や貞の弱枝尾　箇ゝ　コシミツケ　梨柳
夢を噛むにかゝ秋の這入ゝ、　自放
一枝の崖のあゝや　樣の影　ウ庫前　鶯谷
あゝ有りと人　葦を詠めゝ、　理堂
江の島を画はして雪は胡坐ヲ　元冠
その色乃ゝ尾ハゝ　武本庄　幽山
吹さゝれ分の景や　鳥織の甲　丸山　双山
籠花糸銭のゝる　御堂　武折ノ　蟬蛻

按木するゝろもゝあき法師ガ　アキメ　文舟
並ゝ木ふ食者のゝ花柳ガ　アイツ　如髪
氷心花ようつれハちりて　サツテ　不玉
鶯や陸子ようつる伊せゝ松　上ケトミガカ　連南
花中の目ゝも尚ゝ鈴ガ　コシミツケ　自放
尾犬の面ゝゝれて日の永ク　上サアノタハラ　千之
雑子ガ雨のゝきれの茶白山　クルメ　子山
も咲ていやーきゝのハ財布ガ　上ケホミ　無名
風除もあゝよ梅のちる日ガ　チフ大ミヤ　嶺松
膳花風もおゝろや淀の森　フカ川　浮月
彼牙ふやもの上ゝく角田川　スハ丁　白水

画心の雨や柳のうしろ降る　元雄子

橋引て森ゐる小家あり時雨　柳馬子

罠さしの見よ古き豆　京ハシ　悦峰居

杉風もいにしよりし春時　庄内　一柳

石臼よりふるつゆや春時、　蛙人

新子明や二荒山の徳二序　子将

梅有しうるふる海士の戸口　ヒタチ　月滄

むら森あるおもかげの上　アキタ　珀賀

鶯の口まねしてものとうし、　渭貞

森て居るくいに記さし花の散、　いさは

梢うゝ鈴ふりへ斗を雛の家　フカ川　文柳

春の色いかゝ及たる杜若　ミハル　春嶽

光らしやいちこ白ふる鬼の口　アキタ　赤俊　楚雀

彩々を古さぬ夏の中木戸　ダサキ　玉芙

破中の蓮ふうこく波の先　文窓子

森仙の内ゐるゝ失て蓮の散　上ケ　大田　公抒

埋明やつゝと紀し棒所　下ケ　セキ子井　杉香

涼しさや流次第の長代　チハフ　大ミヤ　嶺松

貢献のむよ休むや歩行神　アキタ　丹岡　以左波

虫干の一万や森の山手毛、　田哉

出ぬ月の高し燈ち三笠山　上野　観山

鴨川の水北極さよ五月暗　フカヤ　聽松

風葉の肌よかるるや辻うら　武蔵新宿　蟬蛻
夏もちやそよ紀おるせて書き　庄内　吟砂
嫁入馬穂麦の中を通りけり　芳ヶ　不玉
雷防ぎの水色よめる夕暮て　武蔵高山　重喜
玄通に暑の行歩やたゞ鳥川　西尤下　磊石
蛙しけよ時井を出る赤蜻蛉　下サ行下　呉山
中来の皆ゆくるみちの悔時雨　子将
葛の葉ふよ楽書する山清水　二本松　閑水
暑祀日の袴をかるる陣をかるる　老天　朗亭
抱義よあまの大麦を搗よたより　下谷　嘉山
水音よ矢仮を量る照射うま　元風

琴の音の鳥と思ふ夏山路哉　知足
高安の妹もちやはや七夕菓　寛山
元日や門をうへて雨をあり　ヒメチ　湖嶺
を恵文人の心は花買む、　柳至
素ふし日や人のちひさ紀秋の彩　鶏里子
打ち歩く音も伊へて日永哉　上ケホ　黒白
苗代の水みやまやあすや指の節　常盤
雛の灯ひなふ届くてやるをかな　翠山子
食玉の美くつくんむ門の松　ヒメチ　壺鱗
永出して源の明る紀柳哉　子将
投やりま梨くしまと猫の恋　本々　恭寛

ちる梅や日ケ中うの山仕度　浮月
骨折てをれを焚る樵小　磊石
尾のせいそう聚くや末芽漬　翠羽
鶏なる音あるよ花ハちりちる　房大崩　器玩
衣くしよ人返て柳ケ丸　吉原周秀　花染
制ケ梅ちきき門をまるをし　之愿
ちるを坂や枝の先うち立雪崖　タカサキ　玉芙
うち紙の一人ちんぬひるを　公石
つくしを新見中や仕也雛　広尾家　新甫
寄成少拵て金山ケ家　スハ丁　白水
おもを事皆花よ朱除生成　武蔵岩　重喜

ちれをうを蕚よ交ゆるさんを　十カ月　石桟
迷ふるの拵ものや蕗ー角　東金　利中
春おを式榎の室ちおうを　旭茉
雛のお美花白髪をかをくり　アキタ　雪養
梅ふーさうを　羽ふも、　渭負
を羽ふや春の日脚を暮安き　ヒタチ　木翠
青の仙ケ人出れを野よ隠竜　仙大　琪竹
音柳よ紅ちる音の届きうを　上ケ江　圭芙
簪ゆ貝売ふを汐干ケ　庄内　秋冬
出代の神ゆを　白川
秋を子ゆを変るへー彩飯　千ウ大喜　民芝

遠一矢めなるみやく霧汁（下ヤ）　嘉山

ちさえを梅の科も仕ふ色（房ツ）市交

ちうけし青の姿よ雨の丁（日本ハシ）　嵐松

丁と雀し人ら野向の蜆と（アキメ在府）　梅佳

木芽ある人ゆ中よしやもめ鳥（ツクト）　可寥

野ゆ世ゆの裾も枕も莖弐（ヱチコ）　南呂

古里と葦の先ある余宗ふ（房モシラ）　汀月

出代や袖ゆ加ゆ次沖の石（西九下）　磊石

一人見て独言いゆ梅（ウメ宮）　松声

君ら代の上野の梅咲ゆ（上ケ太田）　玉矣

足ぬるむ水ゆ知てや降る丁　芳蘭

稲神の珍ゆ上ケ三メ山　嵐古

待て戻る仏ら友の咲ゆ（コシミツケ）　宇弘

鶯ゆ野ゆ安ゆ花ゆの風の蕊、ウメ　石宋

雀ゆ鳥ゆ鶯の如ゆ日傘ふ（羽舟ヲカ）　伊左波

惜牛世のうしあしゆ魚、舟コシ　可負

蚊屋ゆ月て赤の月赤ハ志斗ヒ（九山）　月川

ゆや夏とおゆ人ハ月のさ花変（下サノ）　雨苗

灯火の細ゆ水ゆ拾てすみゆ　南枝

夏の月取ゆ蒔茂ゆ花　甫口

柚の花やかゆ孔時の高鳥（コシミツケ）　杉亭

栗布する詞のもやけゆ　子将

麦生ふて芒ふる清し萩の質　白水

糸桐よ妹う羽衣ゆてゆ（芝多）　桐至

雑夜やつれ紀妹う　紀心（雨ヶ谷）　氣月

杉風よ似て芝ふ岩清水（庄内）　其苑

ふし女の行後蒔ぬ豆飯　可丁

燥ふの仲百よ南ふ文衣（土ウラ）　万磨

配膳の神よ配柚の白ふ（シナノ）　秀州

巻藁の弓勢入梅ふ弓（アキノメ　梅佳更）　観山

ふ心よ入梅知る石の壁北　維石

地の疲を色まもつんきぬ牡丹ふ　白水

海の色さめよ老れ初杉魚　童喜

惟光ふ梦ふ〜〜〜〜〜杜宇（ユキヘワタ）　石宋

子結ひ〜〜て忍る壁や時鳥（名大ノ子）　壷蘇

芝雑魚の苴よ杉若ふ子　南呂

物ふ〜〜も岩よ〜〜〜〜〜宋古ふ（サツテ）　不玉

う記人を生ませたつす扇ふ　翠羽

青ふの沸く朱ふ　杜芳（武本庄）　幽山

花咲を板よがくすや衣のくを（アキメ　康浸）　楚崔

七月西の月と森る覧かくや（仙角谷）　春潭

豆魚よ歳ふ暑し老れ物（ウツテヒヘ）　甫口

玉人りの芳丸眠の杉若ふ（スハ丁）　白水

菊ふや杉枝の先の風の茶（チラ　大宮）　嶺松

漏雨拭ひ去て味多窮地　上ケミノウ　圭美
夜納涼や京を彫の多い所　クルメ　子山
涼風やの、字よりよろよ鉈　庵内　龜橋
鶴おや杏よりも月の拵てある、　枝文
涼風に身を任せて散歩哉、　可丁
枝ぶり箒ぶりあるの硯う那　越ヤサキ　玉之
庭ぶよりるひかけるや奄の衣　不玉
和ぶかよりふの蓮よ納涼哉　子將
爪琴のもつみよ味や　郭公　西光下　烏明
涼しさや溶巣よ似る衆見れも　武ヒツタ　梁松
涼の真砂ひきぶさや縄　却　フチサハ　冨屋

夕浪よ山の陰おく桜うす　チヤフ　吉田　嶺鼎
杉風の匂よ赤ふ々ぶもの後、　柳介
もの香や羽おもある　都鳥、　沖栄
行春哉をむさろう桐曲る、　千里
山春ものを貸寸木を延引　仝
昔柳や雨待月の小ぶ、　卅文
情庵て風をあるや小杉原　下サ　千雨　苗
花を見よ来ぶ撞ぶ山の鐘　仝
仁の水よ物書ぶ手や蛍の宮　仝
ちるぶの下ハ陣の地之ぶ　信フジ井　宗休
棒女の雅氷を載る素ぶ　上ケ　ニヌ山　紫桂

吹ぬ日と移りてうゑんゆる柳哉 上ケ山 山杏

山寺や木芽曇りの陸の奥、 京郷

建家を祝ひすまして梅の花、 九嶽

もゝ咲さそ梅原よ入や夕鳥 仝

防ぎや滝芽の水の行清り、 鱗亭

菅よせられて雪の消いそく 羽毛カミ谷地 梶二

月と日ゝあ春も有や花の色 仝

妻恋よ鳴や弥猶の夕まゝ 上タチ下生 勝保

むつまじや雀酒盛春の雨 仝

横ふせる中ちうこゝわ山さくら、 雨谷 弥月

寒らかゝ道のゐーさよ山梅、 亀水

春の後ろすてゝる山ハなのうれ ミノリ 菊兎

菅の乃むさと三声そうへり フカヤ 国秀 加茂

白ひさよ芳やとる杉の家 ヒタチ 壺鱗

もゝ咲しや汐よ任する春 シタヤ 沈川

戸ロゝゝ外のまゝ春の時 子将

もあひて来ーや伏人の戻牛 タカサキ 玉芙

初花城形て呈ゝゝ坊ゝ妻 サツテ 不玉

毬あつて柿よ入ーー女ゝ 下サノテ 雨苗

若中や田ゝを洗ふ忘れ 寛山

空低ーー田ゝーゝ田の水昭り 旭業

水むすよ西梅ゝ指も白魚ゝ 庄内 紫深

鳥ふもきける氣ハ梅歩り　羽角一川　二川

竹椽いつめてけれも梅の毛　信十カセ　彩里

雀子や花見ニ帝ゝ　繻乃上　元雄子

草庵の中り柳ふまえ　元風

防冬のきくもゝん菜一反　小金井　其翼

茂の咲朝やくるる旭のあ　盛之

揺ふして行合人やもの　芳蘭

永き日や水潴ふる竜の鳥　采子　聖魯

海苔飯や梅ゝんの服ハ酒ひ　越ミツケ　杉亭

かりゝ火を又貸寺春の世ふ　ニハンヤ　一笑

花の山ふの鬼ハかゝ　スワヤ　白水

鴨の声杉殿の芦ハ枯ふ　重九更　月川

見ゆゝの雪やふのゝふ雪明り　九十九更　磊石

ふの平ふ見ふ雪や雪ふ　之愚

小春や拾り徒ふふの膏　政風子

流れ末ふも咲素のあゝ　ヒタチ　柳至

ふりかゝる心ふ梅や行千鳥　仝　湖嶺

枯枝ふふふふ枝や夕雨　霜ケ宴　一水

長ふ水を竹火ゆ水ふ　京内　紫染

松ひゞを丘ふむゝや雪の毛　仝　魚橋

身ふつゝる書をゝふや　江戸コ　東く

茶の花やよいこ持る山の象　子将
すゝ掃の小楠よりや小茶垣　丸山　因水
楢の火よ家内の雪もれ掛る　因山
世を九く老こちあれ老の乃中小　庭ケ實　玉瓦
竹を敷て居るや茶瓮　下谷　嘉山
さゝ月ハ古きなしみゝ古りて　吐侯
風よゆりこゆるれり水の月　春石
木枯や引する牛のまれ塩　寛山
竹曲る垣も小春のあまり小　元風
落葉せぬ樹をあてまれ世ゝ　杉枝

沼柿もかそへる程よ吹れ危　二本杉　渕水
焼火して秋を慰む山家小　ミノハ　菊兎
秋の旅鳥吃水を立よ　アキメ　珀賀
秋栗を拾あさしる童うな　武古邨　曼雀
踊りつれも秋人の来ますやと　形大ハシ　吟秋
中秋茶茂笠のうゝ照　カケ手　子将
秋立や三十棒の梅の源　戦スハラ　一松
待宵のよそくしきゝの月　メカサキ　玉芙
紙屑よ嵐の荒るゝ荒小　武本庄　杉鳥
ほの月本城の果よ出るゝ　下サイテ　市巷
きゝ鞠作る灯の垣よ浅　旭業

たゝくと木の葉の散る秋日和　信州上田　五柳

雲花の外を西木のかつら式　今礼　梅甫

牛馬小さくうつる星の秋　千う　炭松

咲ちらす花は屠蘇小、ゝ　雪羽

赤枝や橋をこちひ一筆の雲　絵鳥

紅葉屋は詩のごとき秋の蝶　茂以　陶丘

鳴去きる竈も中や外蔵、　冨屋

十六夜や影も鈴〳〵ま一ぱい　栖笑

七種は人〳〵ぬもをド蘭の花　上ケ大弓、　龍岡

鳴〳〵の鶏や紫苑の先暮く　房小川　梅史

月の雨花のうたはいうたむ　老西口北　柳糸

青空や秋立山の赤昭さま　仙大　桃詠

馬士の喧嘩出さまる花木槿　伊豆　立泡

犬の深りて出さる萩の花　唐　一柳

月はうぬ秋は来るうら萩の風　上ケ下坐　勝保

秋の名の雨かゝるかそる山式　信州木　越中

雲もあゝ柳〳〵ぬや風も月夫ら　南呂

水はまて秋の泊さよ新　月川更　士先

行もの絶弓や蝶の薄ぬる　アキメ　ホタ　音藍

ちせ残雲の雨音委し真の闇　チラ　民芝

雲賣の鳴きて行や月の門　本所　常矣

夕雲や雲を雲を戻る鳴比丘尼　立川　涼月

華は殊切に気のきこえ　旭巣

鶴の目まで衰弱や犬　ヒノデ西口地一斗

雪ふるみよせるや月の出汐迄　子寅

松風の吹抑一ちゝ　ゆゝ　斉　東雪

如意宝殿は高麗の上　子将

子まもあも唐めく宮や　郭公　上ケ多里　仙

昨礼の豆は青て木樵下　サヨテ　不玉

天ゝ代や殊蔵の鬼も百合の花　コモヨコ子　以文

曉の美ゝ空やゝ　ゝ　ゝ　金泉　近舟

引る鮭を目うけて睡る　ウ義お　営谷

白雪ハ降ての後の名月　ヲ大ハ　吟秋

僧一人真菖蒲を原を附雨ゝ　コミ今泉　近舟

押合てあるあ島やあ本立　オノ郡山　徳道

戸口まで月迄ゝ　秋田山名　吟は

赤松のつゝ実美を仰千鳥　六ケ市ヨリ　汶樹

手敬しと海の日和中新の旅　武人ん　一呈

山の桂元西　ゝ　ゝ　帰也　信ムヒ井　弘水

赤坂の怪板搭も小雪塚　ケ芝ケ　柳亞

雪の日の実方崖人ゝれし　上ケ大ケ　就国

鴨ゝ中や星の俤も昔の光　ホツタ原　魚川

森迄ゝ月の輝の音や山家下　サルエ　抱風

地ゝ月の影ゝ千斗一ゝ　抱俄

無月や藪を隔て月ぞあり　仙芝

あれ行く紀伊の面や牧の秋　完哉

松風の歯の音も秋くるる

華の雲よ新しくの時雨ぶ　弊竹

尼細く氷魚の使ひ今朝　理堂

あすの朱橋尼しらみ初時雨　仙大国秀

大佛の綾ゆ乱れて紙鳶　天々

拾ひて雲もさらぬ柳ぶ　ヤヨヌリ庵　陽氏

蓑かるるものとなれば帰花　元洲

紙帽して雨の色なる時雨ぶ　元風

山水の川の平よまして氷る　上ヶ下田沢　素十

子将

武蔵野や雲の上なる秋の雲　武

明月や扇の日をとまき蜀山、　五縄

文冥

梅本やをのれかをりて散まする　下ヶ山岩了　よろつ丸

蔦紅ふまるもいろや三井の鐘　吉郎　利助

明月や朝鮮の海眼のあり　佐倉山　家道

杜宇梅の昔をなげや月、　桃李

散花の流水てゆくそは惜れ、　如酔

湖をふくや蔦のあすの風、　月窓

立秋や新よさ八月　惜の糸、　曙来

秋風や頻よすうれ永白髪　吉郎　松杜

人まねのやうなねむや三日の月　抱儀
象深七彩やとそんる山脚梁　清子
天井は目のつく雪の旦哉　芦雖
寒ふるの柿もおさめ小樽哉　理堂
柳ゆゆ上るる矢先やこの日の月　仙芝
影宅や隅くまでも興有あ　勢竹
枕ちくまで柿ちこれ鄙哉　一九
元の春は水ちかくてなの月　看之
寒のうちを寒ようれ小鄙哉　應秀
柳もけ地を埼や寒の乳　黄陶
枯枝を折紙さく鵙のまう　魯石

嶌や何はつけても山の春　英夫
岸ちかを初時をおとつて　素堂
折燒菜の新備むほの月　舜美

當年男草庵初てまつ紀寿々の多少も
きうをかうく寸上陸く清水吟逢清はおよし
出板延引はお年赤面を極くし何卒来年ハ
寿次第は彫刻は取をり日限の逸出板仕人肖
早春より清出吟の程幸慶哉

月院社　執事

生を養ふの論

天地の子と生れし人を寅に生じ繁
子に開し寅に整て四氣を体し支人を萬物乃
霊にして素と又天地に次くそれを達たるの
代乃てのみならず今の世にいたるまで僅に
半百をこえて人寿乃命数をつらしそれ
申えを思ひやれば喜怒哀楽と精神をも害
故人合れ乃に天命をたもつ事を知ざれば
山野にふせるそのかなしきいのちあるを
庭前に植られてこれを屋内乃こえに成を洞
宝ハ植る皆是私と入て害乃おのれいのち

翁賦中秋奠まつるかのこゝろさしは
せゝ　いけるものゝ好まむ
いつれゝ家をまゝやゝ人ゝ四
時の変化に従ひ春の部
遅ゝ起暮を度る部　疾起秋の早ゝ
部ゝ夜も起きて疾部ゝ遅ゝ起る
是生長の理なり部を対て南の秋
ゝて陽気をとゝけ起る時を強ゝ少
ゝて陰気を感ずい部ゝなけ
足を日あゝ沒ゝ前ゝ髮を拔けつゝ
ゝ遠を遠メ前ゝ疾を出ゝ嚏い

春前ゝ髮を大ゝ長を連ゝ利ゝ
水ゝ属を物ゝ多ゝ人ゝ三足肩癖
を前ゝ萬病を引ゝ年ゝ但ハ春乃
火氏禁を所得拔指竹　榆　拔指葉を之
次ゝを立味の和を愛ゝ苦ゝ
酸所塩ゝ　春を苦を増ゝ　秋を辛を
ゝを藏所増を春の四町の和合を数を五元
井の酸味所あゝハ春の雪を中を藏らむ
又組春の多を中を大拔辛し秋の風を
を所を所を中を藏を拔所を時を
節ゝを傷り春を時を氣を氏中ゝ

幸多くは何を時とはいへども
無ことを願ひて耳をも時々聞くに何傷ふ
る猶細かに行徳いかうしふ酸とぬむ若き
幸にもて是をとうらに若きものしるのに鹹にて
是をとうらに幸に妙者若き若きとして是なるに
鹹をとのひ者を耳にもて是たへ
酸にもて是をとうつし行住坐卧まて大切なる
久〳〵に成て何を無と傷り心に常に久
卧を何を氣を傷り師に常に久〳〵坐を
何を肉を傷り脾に常に久〳〵立を
傷り腎を常に久〳〵行時に節に傷り時を

常に喜怒に傷りの月の行ひあるを共に何に損
ぬる時に何を損ぬる腎を損ぬる
肺を損ぬ思ひ何を脾を損ぬ千幸百若を命の芥
病乃後〳〵に後医療を盡に霊水無に帰に
行に全に成に成浮ひやうに〳〵に二の人すに萬
民ふに動に人やを人をあるに幸を行せあるす
を支しおわるにやう 彼を病ひふ慎に思ひに是をに
御ひ是に成に成に彼をに成に成ひふ何を
難かにやや人合を後命乃養養合必食のひふ
に成に成に幸のに成に方に成に肉に成に者を
ひに成にあるに成に成に酒に病に成に成に

なるまゝにて百薬の長なりとかや性を病とする
仁者は不老長生の薬なりとかや虚弱の人
みな養生しれば色雄なる人にて肉脆き人
なるべかりしに況や穀肉菓菜の類々はなはだ
ら
ば八勢の心得なり唯口を百病の門とす慎む道
疫病流行する毒の気人病をなすこと多い
あるべし飲食寒暖時に順ひ寒暑冷熱よく相
らず不養の自然の天命と保つ道しるべき
賢きを病の人を見て明哲を知る又虚
性病の人を見て得難き仮令一日なりとも延命せい
ものとすべし

自誡二句

六十翁　何丸

守口如瓶　呑吟不命也　朝霧
防意如城　自若乃和　秋家大人春年二句

思ひ出せし人のかなしれ　踏ふ春　分石
梶から栗　歯よあるまじ　子寅

のこる年かゝて六十の笑と言ふのまれ
何ぞ人をつまこゝてのもしも

人のゝ心神仏在
ゝ中身祓之事なり
明治七年　老人

歳古氏六十七年
松月翁寿喜寿といわゝる
拾枝保之一

花ゝ　ほの色ぞふかりける
ちるか名残もちさくらかな
千年ゝ経ても世ゝ